

2. 手の跡が残る、不器用に生きる

人間は生きることの美しさを実現するため必死になって努力したり、あるいは欲望に身を任せたりして理想を現実へと昇華させる。また、これら美しさ（理想）を実現させるために、我々は自らが可能な限り出力できる最大限の力や出来得る限りの手段を用いて生命活動を行う。そしてその中で我々は、自らの持つ力の無さに度々落胆するのである。しかし、我々人間は生を受けた瞬間から限界が定められた中で授かった力を使い、不器用ながらに生きることを選択せざるをえない。母親の子宮で育つ胎児は、内側から母親の腹を蹴ることでその存在を周囲に知らせる。また、その胎児が力いっぱい産声を上げて外の世界に出てくる。これらの行動からは胎児・乳児に与えられたその時の限界の力を最大限に用いて生きようとしている姿をみることができ、そこには本能的な「生」を感じることができる。大人になるにつれて「知」と「技」は磨かれ実現出来ることは増えるが、「生きること」の本質的な部分に関しては変化していないと考えられる。生きている上では誰しも何かしらの理想を思い描いており、その美しき理想を実現させる前段階というものも同時に存在している。そこに我々の本能的な欲求が働き理想に近付くために不器用ながらも赤子のようにいま出せる最大限の力を用いるのである。私はその本能的な欲求とそれによって起こるアクションに「生」を感じている。「生」とはキレイなものではなく、キレイな理想に近付くための不器用且つ生々しい行為そのものである。

先に挙げた赤子の例にみる人間に与えられた力と、その力を最大限に活用して生きるという生が持つ本質。それらが作品に現れること且つ自身の内面的な精神世界における神話が混ざり合い、実体を伴って表出されるとき、それら「作品」と呼ばれるモノは作者自身を生き写したかのような生を感じる存在として体現されるのである。

「芸術家の手〔の跡〕が顕著であればあるほど作品は人間的で、多くのものを語る。絵画面は、どの細部をとっても人間を感じられるものでなければならない。」

—— Jean Dubuffet

RYUYA NAKANE



ドローイングマシン：タイプライター

2020

wood frame, brush, wire, paper, charcoal

540×440×355(mm)

RYUYA NAKANE



ドローイングマシン：車輪

2020

cardboard , brush , wire , paper

700×800(mm)

500×500(mm)

RYUYA NAKANE



ドローイングマシン：パーマ機

2020

wood frame , brush , modeling paste , waste material , wire , charcoal

1800×400×400(mm)

RYUYA NAKANE



ドローイングマシン：手押し車

2020

wood frame , brush , waste material(wheel , caster) , wire , charcoal

1000×1000×800(mm)

RYUYA NAKANE



ドローイング：自由を求めて不自由に動く

2020

paint, drawing machine

variable